



報道提供資料

令和7年7月15日（火）午後4時

問合せ：大阪市鶴見区緑地公園 2-136
（公財）国際花と緑の博覧会記念協会

企画事業部長 三谷彰一

企画事業部企画事業課係長 大栗大

<https://www.expo-cosmos.or.jp>

090-6913-1445（7月15日のみ）

06-6915-4513

2025年（第32回）コスモス国際賞の受賞者は デービッド・アンドリュー・キース博士

公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会（会長：御手洗富士夫）は、7月15日開催の理事会で、コスモス国際賞委員会（委員長：山極壽一）、同選考専門委員会（委員長：池谷和信）からの報告を受け、ニューサウスウェールズ大学生態系科学センター教授デービッド・アンドリュー・キース博士（65歳）を2025年（第32回）コスモス国際賞の受賞者に決定した。

植物生態学的研究を基盤に、地球的視野からの生態系の類型化及び、生態系のレッドリストの確立に尽力し、その保全方法に大きく貢献した。

キース博士は、豪州ニューサウスウェールズ州全域の植生の包括的研究を行い、「IUCN（国際自然保護連合）生態系レッドリスト（red list of ecosystems）」を確立する国際共同研究を主導して、生態系の消失危険性の評価につなげた。

また、野生植物と森林火災との関係性に係る研究なども行い、植物を基礎に地球上の多様な生命の相互作用である「生態系」の研究者として、生物多様性保全の研究、活動に貢献した。

なお、授賞式は、本年10月17日（金）に大阪で開催する予定。



写真は次のURLからダウンロードできます。

<https://www.expo-cosmos.or.jp/main/cosmos/2025photo.html>

1. 授賞の対象

花と緑に象徴される地球上のすべての生命体の相互関係およびこれらの生命体と地球との相互依存、相互作用に関し、地球的視点からその変化と多様性の中にある関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や業績であって、「自然と人間との共生」という理念の形成発展に特に寄与すると認められるもの。

上記の観点から、以下の点を重視する。

- (1) 分析的、還元的な方法ではなく、包括的、統合的な方法による業績であること。
- (2) 地球的視点にたった業績であること。特定の地域や個別的現象に関するものであっても、普遍性があること。
- (3) 直接的な問題解決型ではなく、長期的な視野をもつ業績であること。

2. 選考の経緯

2025 年 4 月から 6 月までコスモス国際賞選考専門委員会を 3 回開催し、139 件を対象に審査した上、6 月 16 日開催のコスモス国際賞委員会で候補者を決定した。

＜2025 年コスモス国際賞の選考対象＞

2023 年 39 件、2024 年 46 件、2025 年 54 件 合計 139 件 (31 カ国)

＜国別内訳＞

日本(25)、アメリカ(17)、イギリス(12)、ドイツ(10)、カナダ(5)、タイ(5)、オーストラリア(4)、オーストリア(3)、ケニア(3)、フランス(3)、イタリア(2)、スウェーデン(2)、フィリピン(2)、ブラジル(2)、アルゼンチン(1)、イスラエル(1)、インド(1)、エジプト(1)、オランダ(1)、コロンビア(1)、中国(1)、ペルー(1)、ベルギー(1)、シンガポール(1)、スイス(1)、スペイン(1)、スロバキア(1)、台湾(1)、デンマーク(1)、トルコ(1)、マレーシア(1)、多国籍(1)、明記なし(1)

※二重国籍はそれぞれカウント

3. その他

(1) 授賞式

令和 7 年 10 月 17 日 (金)、住友生命いずみホール (大阪市中心部) で行う。

(2) その他

受賞者には賞状、賞牌および副賞 (4,000 万円) を贈呈する。

添付資料

- ・受賞者の概要
- ・授賞理由
- ・受賞者コメント
- ・その他 (歴代受賞者、コスモス国際賞委員会委員・選考専門委員会委員名簿)

受賞者の概要

氏名 デービッド・アンドリュー・キース
David Andrew Keith

生年月日 1959 年 11 月 6 日（65 歳）

国籍 オーストラリア

役職 ニューサウスウェールズ大学生態系科学センター教授

学歴

1981 年 シドニー大学 学士（理学）

1991 年 シドニー大学 博士

主な職歴

1982 - 1986 年 ニューサウスウェールズ州国立植物標本館技官

1995 - 1996 年 タスマニア州公園・野生生物局研究助手

1986 - 2022 年 ニューサウスウェールズ州国立公園・野生生物局及びニューサウスウェールズ州環境・遺産局に研究助手として入局、その後上席主席研究員

2012 - 現在 ニューサウスウェールズ大学生態系科学センター教授

主な受賞等

2013 年 オーストラリア生態学会 オーストラリア生態学研究賞

2015 年 Eureka 賞（環境研究部門）（生態系レッドリスト チームリーダー）

2017 年 ニューサウスウェールズ州王立協会 クラークメダル

2019 年 ニューサウスウェールズ州首相賞（環境科学部部門）

2020 年 国際自然保護連合（IUCN）生態系管理委員会（CEM）リュック・ホフマン賞

2021 年 Eureka 賞（環境研究部門）（ニューサウスウェールズ州森林火災研究ハブチーム メンバー）

2022 年 オーストラリア生態学会 生態系影響賞（野生生物および生息地森林火災回復パートナーシップ チームメンバー）

2023 年 オーストラリア科学アカデミー フェロー

2023 年 オーストラリア生態学会 金メダル

2024 年 Eureka 賞（植物科学部門）

主な著書等

1. Keith DA, Ferrer-Paris JR, Nicholson E. et al. (2022) A function-based typology for Earth's ecosystems. *Nature* 610, 513–518. [doi: 10.1038/s41586-022-05318-4]
2. Keith, DA (2017) 'Australian Vegetation', Cambridge University Press, Cambridge.
3. Keith, DA (2004) 'Ocean Shores to Desert Dunes: The Native Vegetation of New South Wales and the ACT'. NSW Department of Environment and Conservation, Sydney.
4. Keith D.A, Rodríguez JP, Rodríguez-Clark KM. et al. (2013) Scientific foundations for an IUCN Red List of Ecosystems. *PLoS ONE* 8(5), e62111.
5. Nicholson E; Watermeyer KE; Rowland JA; ... Keith DA et al. (2021) Scientific foundations for an ecosystem goal, milestones and indicators for the post-2020 Global Biodiversity Framework. *Nature Ecology and Evolution* 5, 1338–1349. [doi: 10.1038/s41559-021-01538-5],
6. Keith, D.A., Akcakaya, H.R., Thuiller, W., et al. (2008) 'Predicting extinction risks under climate change':
7. Keith DA, Rodríguez JP, Brooks TM et al. (2015). The IUCN Red List of Ecosystems: motivations, challenges and applications. *Conservation Letters* 8, 214–226. [doi: 10.1111/conl.12167]
8. Obura D, Gudka M, Samoilys M, ... Keith DA et al., F. (2022) 'Vulnerability to collapse of coral reef ecosystems in the Western Indian Ocean', *Nature Sustainability* 5, 104–113.
9. Keith DA, Benson DH, Baird IRC et al. (2023) Effects of interactions between anthropogenic stressors and recurring perturbations on ecosystem resilience and collapse. *Conservation Biology* 37(1), e13995. [DOI:10.1111/cobi.13995]
10. use of threatened species lists. *Trends in Ecology and Evolution* 17, 503–507
11. Tóth AB, Terauds A, Chown SL, ... & Keith DA (2025). A dataset of Antarctic ecosystems in ice-free lands: classification, descriptions, and maps. *Scientific Data* 12, 133. [https://doi.org/10.1038/s41597-025-04424-y]
12. Nicholson E, Andrade A, Brooks TM, ... Keith DA et al. (2024) Roles of the Red List of Ecosystems in the Kunming-Montreal Global Biodiversity Framework. *Nature Ecology & Evolution* 8, 614–621. <https://doi.org/10.1038/s41559-023-02320-5>

授賞理由

デービッド・アンドリュー・キース博士は、オーストラリアを対象にした植生学・生態学的研究、生態系のレッドリストの評価に関する地球的視野からの研究、環境保全のために世界の生態系を類型化する研究に大きく貢献した研究者である。

博士は、研究キャリアの初期から、地元オーストラリアの植物相や植生の研究に取り組んだ。その集大成であるニューサウスウェールズ州の植生全体をまとめた著書『海岸から砂漠まで：ニューサウスウェールズとオーストラリア首都特別地域の在来植生』は、専門家のみならず一般でも広く活用されている。また、博士は、火が自然生態系にもたらす影響（ファイヤーエコロジー）に関する研究として、植物が自然火災に依存する傾向を機能形態から予測し、オーストラリア特有の生態系の維持に定期的な自然火災が重要な役割を果たしていることを明らかにした。これは、世界各地の森林火災発生地域における野生植物と火の関係性を鑑みる上で、普遍的で重要な研究といえる。

さらに博士は、気候変動のもとでの生物種の絶滅危険性の予測に関する研究をはじめ、絶滅危険性の検出および評価に関する研究も数多く行っており、保全生物学の分野でも顕著な業績を上げている。特に、これまで基準がなかった生態系自身の消失危険性の評価に関して、新しい手法である「IUCN（国際自然保護連合）生態系レッドリスト（red list of ecosystems）」を確立する国際共同研究を主導し、この仕組みの全世界的な普及を精力的に行なっている点は特筆に値する。

地球上に存在する多様な生態系の的確な保全には、その対象を明確にするための全世界で適応可能な生態系の類型化が必要である。博士は、保全対象となる生態系の類型化に関する研究も行ない、生態系機能に注目して、自然・人工を問わず全世界の陸上（地上、地下）・水圏（陸水、海洋）生態系の全てを分類する国際共同研究を主導した。この研究によって IUCN グローバル生態系類型化体系第 2 版（IUCN Global Ecosystem Typology 2.0）が完成し、これによって生態系の消失危険性の評価を行えるようになった実績は画期的なものである。

以上のようにキース博士の研究は、地元オーストラリアでの植物生態学的研究をベースにして世界的な視野での生態系の消失危険性の評価に関する研究へ、そして世界の生態系の分類研究へと展開してきた。生態系は、地球上の多様な生命の相互作用の総体である。人類活動によって生物多様性の減少が急速に進行する現在、上位階層として生物多様性の不可欠な構成要素である生態系の保全は火急を要する。キース博士によるマクロな生態系の評価方法の確立とその保全の研究は、包括的・統合的な視点及び普遍性を重視するコスモス国際賞の授賞にふさわしいと評価した。

受賞者コメント

2025 年コスモス国際賞を頂き、大変光栄に思います。優秀な同僚と共に生態系の保全に従事し、その仕事は自然と人間との共生に貢献するものとして、コスモス国際賞委員会及び公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会様に認められたことは特別なことです。

私の両親は 12 歳と 14 歳で学校を辞めましたが、教育に価値を認めていたため、資力を尽くして私に学ぶ機会を与えてくれました。今日に至るまで、私は観察や他者との交流を通じて、そして心の奥深くから湧き上がる情熱をもって学び続けています。やがて私は、自然を理解し、尊重することは、文化を超えて不可分につながっており、この相互依存関係が、自然と人間の未来にとって不可欠であることに気づきました。

私の幼少期は、家族の話やドキュメンタリー番組で得た知識、そしていくつかの直接的な経験を通じた自然とのつかの間のやりとりで彩られていました。自然研究の分野でキャリアを積むことができると気づいたのは 19 歳になってからで、21 歳になる頃には生態学分野で終身在職権を持つ政府機関の研究助手になっていました。愛情深く支えてくれる家族や、刺激を与えてくれる研究指導者、素晴らしい学生仲間たちが、この転機と私のキャリアの基盤となりました。

初期のニューサウスウェールズ州国立植物標本館での研究がきっかけとなり、私は系統分類学、そして記載生態学（特に植生調査とマッピング）に新たに取り組み始めました。我々の研究を地域のコミュニティや当局と共有したことは、土地利用が急速に進む時代に残存する生態系の保護と持続可能な管理において、いくつもの小さな進展の支えとなりました。研究の合間に、私はパートナーであるベリンダと共に、オーストラリアの荒野を見るという人生を変えるような経験をしました。旅から戻った後、私たち二人は家庭を築き、今ではそれが私たちの存在の基盤となっています。私はフルタイムで働きながら大学院での研究を始め、国立公園・野生生物局に異動しました。そこで私は、生物多様性の保全と管理を支援するため、生物多様性の調査を命じられた小さなグループの一員となりました。その後、同局とニューサウスウェールズ大学の共同ポジションに就き、さらに 10 年後、フルタイムで同大学に移りました。

私は学びへの情熱から、個体群、種から生態系までを研究し、生態学と保全の多角的側面に詳しい専門家としての成長を追求するようになりました。生態系の概念は、生物多様性の保全と人間のウェルビーイングの維持、その両方にとっての強力な手段として現れました。

我々の研究は、生態系のリスク評価方法の開発において飛躍的な進展を遂げました。この方法は 2008 年の世界自然保護会議によって義務付けられ、後に生態系のレッドリスト（RLE）として、国際自然保護連合（IUCN）によって採用されました。これにより、さまざまな生態系の種類に対する相対的なリスクを評価し、その根本原因を診断し、リスク軽減戦略および自然を基盤とした解決策に役立てることが可能となりました。次に、地球上の多種多様な生態系に関する一貫した評価と知識の伝達を促進するための分類枠組みが必要となりました。世界の専門家ネットワークとの協働により、陸地、淡水、深海、さらには地下の主要な生態系グループを分類した、初めての包括的な地球規模生態系分類（Global Ecosystem Typology）が作成されました。

今では、全大陸の 100 カ国以上から 5,000 を超える生態系の種類がリスク軽減戦略の指針および報告となるレッドリスト評価を受けています。我々 RLE チームの取り組みを通じて、現在、RLE と地球規模生態系分類は、国連生物多様性枠組（Global Biodiversity Framework）と国連国民経済計算基準（UN standards for national accounts）で採用されています。これは、加速する自然の減少と人間の生活の質の低下を食い止め、逆転させるための基盤を築くものです。最終的に、成功は私たちが個人、文化、企業、組織として、自然そのものを理解し、自然が私たち全員のために何をし、何をしてくれるのかを理解し、評価することにかかっています。これこそが、自然と人間との共生のための行動を動機づけ、持続させることを可能にする唯一の方法なのです。この賞の受賞を励みに、これからも地球と人類のより良い未来のため、力と尽くしていきたいと思います。

コスモス国際賞歴代受賞者（肩書きは受賞時）

「コスモス国際賞」は、「自然と人間との共生」という理念の発展に貢献し、「地球生命学」とも呼ぶべき、地球的視点における生命相互の関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や学術活動を顕彰するために設けられた国際賞です。

1993 年（第 1 回）受賞者

ギリアン・プランス卿【イギリス】 王立キュー植物園園長

南米アマゾン地域を中心とする熱帯植物研究の権威。地球全域の植生を統一データ化する「地球植物誌計画」を提唱、世界の植物学者とネットワークを組んで実現に努力した。

1994 年（第 2 回）受賞者

ジャック・フランソワ・バロー博士（物故者）【フランス】 パリ国立自然史博物館教授

太平洋の島々の自然と人々の暮らしについて民族生物学的な調査、研究を行い、これをもとに人間と食糧をテーマに、全地球的な視点からユニークな考察を発表した。

1995 年（第 3 回）受賞者

吉良 龍夫 博士（物故者）【日本】 大阪市立大学名誉教授

光合成による植物の有機物生産の定量的研究をもとに、生態学の新分野となる生産生態学を確立。東南アジア地域の熱帯林生態系の研究で指導的な役割を努めた。

1996 年（第 4 回）受賞者

ジョージ・ビールズ・シャラー博士【アメリカ】 野生生物保護協会科学部長

40 年にわたり、世界各地で様々な野生生物の生態と行動を研究。『マウンテンゴリラ・生態と行動』『ラストパンダ』など数多くの著書で全世界に野生動物の実態を知らせた。

1997 年（第 5 回）受賞者

リチャード・ドーキンス博士【イギリス】 オックスフォード大学教授

1976 年に出版された著書『利己的な遺伝子』で、生物学の常識を覆す大胆な仮説を発表。その後も、生物の進化について新しい見解を提示して、学会に論争を起こしている。

1998 年（第 6 回）受賞者

ジャレド・メイスン・ダイヤモンド博士【アメリカ】 カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授

医学部教授として生理学を研究する一方、40 年にわたりニューギニアの熱帯調査を行い、これらを基に人類の歴史的な発展を再構成したユニークな考察を発表した。

1999 年（第 7 回）受賞者

呉 征鎰（ウー・チェン・イー）博士（物故者）【中国】

中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長

中国を代表する植物学者。中国を拠点に東アジア地域の植物の調査研究に取り組み、中国全土の植物の種の多様性を網羅する『中国植物誌』の編集を主導、刊行を実現させた。

2000 年（第 8 回）受賞者

デービッド・アッテンボロー卿【イギリス】 映像プロデューサー、自然誌学者

野生生物のドキュメント映像のパイオニア。BBC 時代から退社後を含め、約半世紀にわたって、地球上の野生の動植物の生の姿を、優れた映像で全世界に伝えた。

2001 年（第 9 回）受賞者

アン・ウィストン・スパーン教授【アメリカ】 マサチューセッツ工科大学教授

都市と自然は対立するものでなく、周辺の地域環境と調和し、その一部として存在する都市の構築が可能であるとし、都市が自然との調和をはかりながら発展する方策を示した。

2002 年（第 10 回）受賞者

チャールズ・ダーウィン研究所【エクアドル】

1964 年設立の国際的 NGO・NPO 組織。南米エクアドル領のガラパゴス諸島で、ゾウガメ、イグアナなど、特異な固有生物の調査研究と保護に当たっている。

2003 年（第 11 回）受賞者

ピーター・ハミルトン・レーブン博士【アメリカ】 ミズーリ植物園園長

米国を代表する植物学者で、地球の生物多様性の保全を提唱した国際的な先駆者。常に地球的な視点で生命の問題を考え、学術と実践両面で自然と人間との共生に貢献した。

2004 年（第 12 回）受賞者

フーリャ・カラビアス・リジョ教授【メキシコ】 メキシコ国立自治大学教授

途上国の立場から全地球的な環境問題を考え、フィールドワークとさまざまな学問分野の研究を統合したプログラムを実施し、異なる条件下での困難な課題に優れた成果を挙げた。

2005 年（第 13 回）受賞者

ダニエル・ポーリー博士【カナダ】

ブリティッシュ・コロンビア大学水産資源研究所所長・教授

漁業と海洋生態系の関連を包括的に研究。海洋生態系保全と水産資源の持続的利用を可能にする科学的モデル開発など、海洋生態系と資源研究の分野で優れた業績を収めた。

2006 年（第 14 回）受賞者

ラマン・スクマール博士【インド】 インド科学研究所 生態学センター・教授

ゾウと人間との生態関係や軋轢への対処をテーマとした研究から、生物多様性保護と自然環境の保全全般にわたる多くの提言を行い、かつ実行し、野生生物と人間との共存という分野での先駆的な取り組みを行なった。

2007 年（第 15 回）受賞者

ジョージナ・メアリー・メイス博士（物故者）【イギリス】

ロンドン大学自然環境調査会議個体群生物学研究センター所長兼教授

絶滅危惧種を特定・分類し、科学的な基準を作成することにおいて指導的役割を果たし、種の保全、生物多様性保全に大きく貢献する取り組みを行なった。

2008 年（第 16 回）受賞者

ファン・グエン・ホン博士【ベトナム】 ハノイ教育大学名誉教授

戦争や乱開発がマングローブの生態系に壊滅的な打撃を与えたベトナムで、マングローブの科学的、包括的な調査・研究を行い、マングローブ林の再生に大きな成果をあげた。

2009 年（第 17 回）受賞者

グレッチェン・カーラ・デイリー博士【アメリカ】 スタンフォード大学教授

人類社会が依存する生物多様性のもつ「生態系サービス」の価値を包括的に捉えて、「国連ミレニアム生態系評価」など国際的な取り組みに貢献するとともに、生態学・経済学を統合し、自然資本の持続的な利用のために「自然資本プロジェクト」を実施する等大きな役割を果たした。

2010 年（第 18 回）受賞者

エステラ・ベルグレ・レオポルド博士（物故者）【アメリカ】 ワシントン大学名誉教授

父アルド・レオポルド氏（1887－1948）が提唱した「土地倫理」を継承・追及するとともに、アメリカ各地においてこの考えを広げるなど、多大な功績を残した。

2011 年（第 19 回）受賞者

海洋生物センサス科学推進委員会 事務局：アメリカ

海洋生物の多様性、分布、生息数についての過去から現在にわたる変化を調査・解析し、そのデータを海洋生物地理学情報システムという統合的データベースに集積することにより、海洋生物の将来を予測するプロジェクト「海洋生物センサス」を主導した。

2012 年（第 20 回）受賞者

エドワード・オズボーン・ウィルソン博士（物故者）【アメリカ】 ハーバード大学名誉教授

アリの自然史および行動生物学の研究分野で卓越した研究業績をあげ、その科学的知見を活かして人間の起源、人間の本性、人間の相互作用の研究に努めたほか、生物多様性保全や環境教育を推進する実践家として活動した。

2013 年（第 21 回）受賞者

ロバート・トリート・ペイン博士（物故者）【アメリカ】 ワシントン大学名誉教授

生物群集の安定的な維持に捕食者の存在が不可欠なことを、明快な野外実験によって示し、キーストーン種という概念を提唱した。一連の研究は、生物多様性を扱う群集生態学の分野に新しい視点をもたらし、生態学はもとより保全生物学や、一般の人々の生物多様性への理解に大きな影響を与えた。

2014 年（第 22 回）受賞者

フィリップ・デスコラ博士【フランス】 コレージュ・ド・フランス教授

人類学者として、南米アマゾンに住む先住民アチュアの人々の自然観とそこの自然と関わる諸活動に焦点を当て、これらの綿密な調査から哲学的な思想へと論を進め、自然と文化を統合的に捉える「自然の人類学」を提唱した。

2015 年（第 23 回）受賞者

ヨハン・ロックストローム博士【スウェーデン】

ストックホルム・レジリエンス・センター所長

人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達した時に不可逆的で大きな変化が起こりうるとし、プラネタリーバウンダリーを把握することで、壊滅的な変化を回避でき、その限界がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示した。

2016 年（第 24 回）受賞者

岩槻 邦男 博士【日本】 東京大学名誉教授

生物多様性を探求し、伝統的な手法に加えて、分子系統的な手法も取り入れつつ、包括的かつ多面的に植物系統分類学を発展させた。また、系統分類学を含めた多様性生物学による生物の統合的理解の重要性を説き、そのような理解が生物の豊かさや自然との共生を支える重要な原理であることを明らかにした。

2017 年（第 25 回）受賞者

ジェーン・グドール博士【イギリス】 ジェーン・グドール・インスティテュート創設者

1960 年から、野生チンパンジーの研究を続け、その全体像を明らかにするとともに、チンパンジーが住む森を保全するための植林活動や環境教育活動を行った。博士が創案した青少年が担い手となる環境教育プログラム「ルーツアンドシューツ」は 99 カ国で約 15 万団体が、その活動を展開している。

2018 年（第 26 回）受賞者

オギュスタン・ベルク博士【フランス】 フランス国立社会科学高等研究院教授

和辻哲郎の著作「風土」から大きな影響を受け、風土概念をさらに拡充、深化、発展させ、「風土学（*mésologie*）」と名づけられる新たな学問領域を切り拓き、自然にも主体性があるという「自然の主体性論」を提唱した。

2019 年（第 27 回）受賞者

スチュアート・L・ピム博士【アメリカ】 デューク大学教授

地球上の生物の食物網の複雑さや種の絶滅速度等についての理論を提唱し、地球規模の生物多様性に関する政策などに大きな影響を与えると共に、生物保全活動を実践する団体を支援する NGO を設立するなど、生態系や生物多様性の保全に対して、科学と実践の両面において多大な功績を収めた。

2021 年（第 28 回）受賞者

ピーター・ベルウッド博士【オーストラリア】 オーストラリア国立大学名誉教授

考古学、言語学、人類生物学の学際的研究による「初期農耕拡散仮説」を提唱し、農耕の起源と初期農耕民の移動・拡散過程を明らかにするとともに、この研究を通して、自然と人間との共生の歴史を統合的な視点から探求した。

2022 年（第 29 回）受賞者

フェリシア・キーシング博士【アメリカ】 バード大学教授

自然生態系の生物多様性と、人獣共通感染症病原体が人間社会へ伝播するリスクとの関係性を、実践的な調査研究によって明らかにし、ポストコロナ時代における自然と人間の共生のあり方に科学的な示唆を与えた。

2023 年（第 30 回）受賞者

クリスティン・シュレイダー＝フレシェット博士【アメリカ】

ノートルダム大学 オニール家講座 名誉教授

環境問題を考察する際に「環境正義」の概念が重要であることを提唱し、現在の環境問題に対する姿勢に警鐘を鳴らした。博士が積極的に関与してきた定量的リスク評価手法に基づく「環境正義」は、誰もが健全な環境で暮らせる社会の実現を目指す際の不可欠な指針となっている。

2024 年（第 31 回）受賞者

ウィリアム・ジェームズ・サザーランド博士【イギリス】 ケンブリッジ大学動物学科研究部長

「エビデンスに基づいた保全」を提唱し、世界中の膨大な研究論文より情報を集積したウェブサイトを構築する等、生物多様性保全のあり方に革新をもたらした。

2025 年コスモス国際賞 賞委員会委員および顧問
International Cosmos Prize Committee

2025. 6 (五十音順)

役職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	山極 壽一 Dr. YAMAGIWA Juichi	人類学、霊長類学 Anthropology, Primateology	総合地球環境学研究所所長 Director General, Research Institute for Humanity and Nature
副委員長 Vice Chairperson	中西 友子 Dr. NAKANISHI Tomoko	放射線植物生理学 Radioplant physiology	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	秋道 智彌 Dr. AKIMICHI Tomoya	生態人類学 Ecological anthropology, Ethno-biology	山梨県立富士山世界遺産センター所長 Director General, Fujisan World Heritage Center
委員 Member	浅島 誠 Dr. ASASHIMA Makoto	発生生物学 Developmental biology	帝京大学特任教授 Research Professor, Teikyo University
委員 Member	池内 了 Dr. IKEUCHI Satoru	天文学 Astronomy	総合研究大学院大学名誉教授 Professor Emeritus, The Graduate University for Advanced Studies
委員 Member 選考専門委員会委員長兼任	池谷 和信 Dr. IKEYA Kazunobu	環境人類学 Environmental anthropology	国立民族学博物館名誉教授 Professor Emeritus, National Museum of Ethnology
委員 Member	白山 義久 Dr. SHIRAYAMA Yoshihisa	海洋生物学 Marine biology	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	西澤 直子 Dr. NISHIZAWA Naoko	植物分子生物学 Plant molecular biology	石川県立大学参与 Counselor, Ishikawa Prefectural University
委員 Member	林 良博 Dr. HAYASHI Yoshihiro	動物資源科学 Animal science and resource	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	村上 哲明 Dr. MURAKAMI Noriaki	植物系統分類学 Plant Phylogeny and Taxonomy	兵庫県立人と自然の博物館館長 Director, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo
委員 Member	横張 真 Dr. YOKOHARI Makoto	緑地環境科学 Landscape and environmental science	東京大学総括プロジェクト機構 特任教授 Project Professor, Organization for Interdisciplinary Research Projects The University of Tokyo
委員 Member	鷺谷 いづみ Dr. WASHITANI Izumi	生態学・保全生態学 Ecology, Conservation ecology	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo

役職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
顧問 Advisor	岩槻 邦男 Dr. IWATSUKI Kunio	植物分類学 Systematic botany	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
顧問 Advisor	尾池 和夫 Dr. OIKE Kazuo	地球科学 Geoscience	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
顧問 Advisor	岸本 忠三 Dr. KISHIMOTO Tadamitsu	免疫学 Immunology	大阪大学免疫学フロンティア研究センター特任教授 Project Professor, Immunology Frontier Research Center , Osaka University
顧問 Advisor	中村 桂子 Dr. NAKAMURA Keiko	生命科学・生命誌 Biohistory	JT 生命誌研究館名誉館長 Honorary Director, Biohistory Research Hall

2025 年コスモス国際賞 選考専門委員会委員
International Cosmos Prize Screening Committee of Experts

2025. 6 (五十音順)

役 職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	池谷 和信 Dr. IKEYA Kazunobu	環境人類学 Environmental anthropology	国立民族学博物館名誉教授 Professor Emeritus, National Museum of Ethnology
副委員長 Vice Chairperson	佐倉 統 Dr. SAKURA Osamu	科学技術社会論 Science and technology studies	実践女子大学人間社会学部 教授 Professor, Faculty of Human and Social Studies, Jissen Women's University
委員 Member	上原 麻有子 Dr. UEHARA Mayuko	日本哲学 Japanese philosophy	京都大学大学院文学研究科 教授 Professor, Graduate School of Letters, Kyoto University
委員 Member	沖 大幹 Dr. OKI Taikan	地球水循環システム Global Hydrological System	東京大学大学院工学系研究科 教授 Professor, School of Engineering, The University of Tokyo
委員 Member	亀山 康子 Dr. KAMEYAMA Yasuko	国際関係論 International relations	東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授 Professor, Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo
委員 Member	深町 加津枝 Dr. FUKAMACHI Katsue	緑地環境科学 Landscape and Environmental science	京都大学地球環境学堂 准教授 Associate Professor, Graduate School of Global Environmental Studies (GSGES), Kyoto University
委員 Member	シュテファン・ホーテス Dr. Stefan Hotes	景観生態学 Landscape Ecology	中央大学理工学部人間総合理工学科 教授 Professor, Faculty of Science and Engineering, Chuo University
委員 Member	宮下 直 Dr. MIYASHITA Tadashi	生物多様性科学 Science of Biological Diversity	東京大学大学院農学生命科学研究科 教授 Professor, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo
委員 Member	湯本 貴和 Dr. YUMOTO Takakazu	植物生態学 Plant Ecology	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	横山 潤 Dr. YOKOYAMA Jun	植物分類学 Systematic botany	山形大学理学部 教授 Professor, Faculty of Science, Yamagata University